

## 「ハナミズキに桜の雨を」

### 【登場人物】

・ みずき  
・ 桜

※…状況説明、場所

N…ナレーション（回想か否かにかかわらずすべて現在の年齢の声で）

SE…効果音

---

### 【本編シナリオ】

#### プロローグ

##### ①幼稚園・出会い

※みずきと桜の幼少時代。幼稚園

SE…雨

SE…幼稚園部屋内ガヤ

桜N

「確かこの日は、雨が降っていたんだと思う。新しい幼稚園に転園してきたあたしは、一通りクラスメイトとお喋りしたあと、まだ挨拶していなかったある女の子に目を向けた。一人で席に座って、クレヨンで何かを熱心に描いている」

SE…みずき、クレヨンで絵を描く

桜N

「あたしもお絵かきは好きだ。当時、小学校に上がる前に友達を百人つくろうと意気込んでいたあたしは、これを機にその子に話しかけることにした」

SE…桜、みずきに近づく

桜

「こんにちは」

みずき

「……」

桜N 「彼女は黙ったまま、あたしを見上げた。けれど目は合わない。いったいどこを見ているんだろう」

桜 「あたし、桜。あなたのお名前は？」

みずき 「……みずきです」

桜 「みずきちゃんね、よろしく！　ねえ、それ、何描いてるの？　あたしも一緒にいい？」

SE…みずき、桜の腕を引く

桜 「わっ……な、なに？」

みずき 「座ってください」

桜 「え？」

みずき 「その席」

桜 「ああ……そこ？」

SE…桜、みずきの右側の席に座り向かい合う

桜 「これでいい？」

みずき 「そのまま動かないで」

桜 「う、うん」

SE…みずき、画用紙にクレヨンで描く（継続）

桜 「……もしかして、あたしのこと描いてるの？」

みずき 「動かないでください」

桜 「むー……」

桜N 「自分が絵のモデルになるのは嫌じゃない、むしろ嬉しい。ただ、退屈だった。目の前の彼女はただひたすら無言で、画用紙にクレヨンを走らせている。途中で一度だけ目が合った。真っ直ぐな瞳に、あたしは思わず吸い寄せられそうになった」

桜 「……ねえ、ちょっとだけ見せて」

みずき 「あ……」

S E .. 桜、身を乗り出す

S E .. クレヨンの音終わり

桜  
「(驚きと感動) ……!」

桜 N  
「このときからあたしは、すべてを決めていたんだと思う」

## 1. ずっと一緒に

### ① 美術室・デッサン

※現在、高校の美術室。椅子に座って動かない桜と、彼女を描いているみずき

SE…スケッチブックにデッサンしているみずき（継続）

みずきN「窓の外を見つめる桜は、夕暮れの光を受けながら、憂いを帯びたような表情を浮かべていた。彼女の短い髪を描きながら、相変わらず端正な顔立ちだと感心する。私は彼女を見つめて、その姿を正確に捉えていった。スケッチブックの中の桜が、次第に本物と同じ美しさを纏っていく――」

SE…描く音終わり

みずき「桜、体勢辛くないですか？」

桜「大丈夫、続けて」

みずき「わかりました」

SE…描く音再開（継続）

みずきN「幼稚園で出会ってから、随分と時間が経った。桜はいつも傍にいてくれる。今もこうして私の右側の席という定位置に座り、美術室で週二回、デッサンのモデルを引き受けてくれている。黙ったままの桜は、他の人から見れば可憐で神秘的だ。けれど私はその中身を知っている。きつと今頃頭の中は、夕飯のことでいっぱいだろう」

桜「（小さな溜息）はあ……」

みずき「どうかしましたか？」

桜「最近お肉あんまり食べてないなって思っ。でも今夜はハンバーグなんだって。だから思いを馳せてるの」

みずき「ハンバーグに？」

桜「ハンバーグに」

みずき「……桜がいつもの桜で安心しました」

桜「どういう意味よお」

みずき「そのままの意味です」

桜 「みずきは謎だなあ」

みずき 「昔からこんな感じですよ」

桜 「……確かに。ほら描いて描いて」

みずき 「描いてますよ。もうすぐできます」

みずき N 「普段あまり人と話さない私と、人気者の桜。周囲から距離をとられることの多い私に、彼女はいつも変わらず接してくれた。そんな彼女を、私は誰よりも信頼していた。私には桜が必要だ。だからこそ、考えてしまう。桜が私だけの桜であればいいのに、と」

※時間経過。座っている二人。桜、伸びをする

桜 「はー、終わったー」

みずき 「今日もありがとうございました。いい練習になりました」

桜 「なら良かった。あ、ところでさ……そちのクラスって英語の小テストやった？  
同じ先生だよね」

みずき 「はい、ちょうど今日」

桜 「えっ、問題どんなの出た!？」

みずき 「(たしなめる)……桜」

桜 「えへへ……だって、英語苦手なんだもん」

みずき 「そんなこと言って、成績悪くないじゃないですか」

桜 「平均点よりは上いきたいの、親にも色々言われるし。でも英語は毎回苦労するんだよね……」

みずき 「だからといって、問題を教えるわけにはいきません。それにあの先生のことです、クラスごとに内容を変えてると思いますよ」

桜 「前から思うんだけど、そういうのって問題のレベルに差、出ないのかな」

みずき 「……どちらも教科書を元に作ってるんですから、そんなに違いはありません。つべこべ言わず諦めて勉強してください」

桜 「みずきの意地悪ー!」

みずき 「貴女はなんやかんやちゃんと勉強するってわかってますから」

桜 「うー……そう言われると……」

みずき 「だから、私が手を貸さなくても大丈夫ですよね？」

桜 「……信じてくれるのはいいんだけど……もうちょっと心配してくれてもいいのになあ」

みずき 「心配、ですか？」

桜 「だって、今までずっと同じクラスだったんだよ？　それが高校最後に別々になつちやっただから。目の届かないところであたしがピンチになったらどうするの？　現に今ピンチだし」

みずき 「それはそうですけど……貴女なら大丈夫だって思ってますし、何かあれば相談してくれば……。それに、お昼休みはいつも会ってるでしょう？　こうして放課後だって」

桜 「そうだけども……」

みずき 「隣のクラスなんですから、会おうと思えばいつでも会えます。私たち、友達じゃないですか」  
桜 「……う、うん」

※何か言いたげな桜。しかしすぐに表情を戻す

桜 「みずきは、これからまたデッサン？」

みずき 「ええ。今日は時間ぎりぎりまでやるつもりです」

桜 「そっか」

S E…桜、椅子から立ち上がる

桜 「じゃあ、あたしは退散しよっかな。夕飯までには帰るって言っちゃったし」

みずき 「わかりました。ハンバーグ、楽しみですね」

桜 「すっごく楽しみ！」

みずき 「ふふ、お氣をつけて」

桜 「また明日ね！」

S E…美術室を出ていく桜

※みずき、スケッチブックを見つめる

みずき 「……」

※絵の中の桜に描き足し、髪を長くする

S E…みずき、線を描く

みずき N 「絵の中の、桜の髪を描き足す。出会った頃、彼女の髪はもっと長かった。だけど

小学五年生の頃だろうか、彼女は突然髪を切った。それも私と同じくらい短く。私はその姿を見てショックだったのを、未だに覚えている」

SE…鉛筆を置く

みずきN「それ以降、桜が髪を伸ばすことはなかった。髪型なんて個人の好みだということ  
はわかっている。けれど私は、髪の長かった頃の桜を忘れられなかった。それだけ  
美しかったのだ」

SE…みずき、自身の髪に触れながら

みずき「(呟き) でも、私が勝手に求めているだけなのかもしれませんね……」

## ②昼休み・桜の気持ち

※数日後、昼休み。屋上に並んで座っているみずきと桜

SE…桜、みずきの前の弁当箱を開ける

桜「はい、今日のお弁当。みずきの好きなゴボウ入り肉団子入れておいたよ。あと卵  
焼きも」

みずき「ありがとう、桜。いつも作ってもらってすみません」

桜「いいの、好きでやってるんだから。さ、食べて食べて！」

みずき「では、いただきます」

桜「あたしも、いただきます」

SE…みずき、箸を手に取りおかずをつまむ

みずき「(食べて) ……美味しいです」

桜「良かった！」

みずき「桜は本当に料理上手ですね」

桜「人並みだよ。けど、みずきに作るようになってちょっと上達したかも。みずきつ  
て昔から集中すると、食べるのも寝るのも忘れるんだもん。だからせめて栄養つけ  
てもらわないとね」

みずき 「ふふ……私のこと、いっぱい考えてくれてるんですね」

桜 「と、当然よ。この間だって、コンクールの作品描いてるとき、大変そうだったし」

みずき 「ご心配おかけしました。でも、今年が頑張りどころなので……」

桜 「……そうだね」

みずき 「私、立派な画家になりたいんです。だからまず、このコンクールで本選に行って、金賞を取りたい」

桜 「みずきならできるよ。だって凄く上手いもん、それに頑張り屋さんだし」

みずき 「ありがとう、桜」

桜 「というわけで、これも食べて。アスパラのベーコン巻き」

みずき 「桜も自分の食べてください。まだ口つけてないでしょう？」

桜 「これから食べるって。まあまあ、どうぞ」

SE…桜、箸を手に取りおかずをつまむ

みずき 「あ、ちよ、ちよっと、自分で食べますから……」

桜 「遠慮しないの。はい、あーん」

みずき 「う……あ、あーん……（食べる）」

桜 「どう？ 美味しい？」

みずき 「（嚙んで飲み込む）……美味しいです」

桜 「えへへ、やったあ！」

SE…みずき、ハンカチで口元を拭く

みずき 「（口元を拭いて）……なんだか、子ども扱いされてる気分です」

桜 「え、そうなの？ それはちよっと……子どもだね」

みずき 「ど、どういうことですか？」

桜 「ううん、みずきが鈍いのなんて今に始まったことじゃないから、大丈夫」

みずき 「（焦り）えっ、え……？」

桜 「あはは、まあいいじゃない。みずきはみずきのままでいいよ」

みずき 「（困る）全然わかりません……」

SE…桜、ペットボトルを開けて口に含む

桜 「（飲んで）……ねえ。みずきはさ、進路どうするの？」

みずき 「え？」



SE…桜、ペットボトルの蓋を閉めて置きながら

桜 「あたしは……これからもみずきとずっと、一緒にいたいな」

みずき 「……」

桜 「だって、こーんなに小さいときから一緒だったんだよ？ 今更離れるのもなんか、って感じじゃない？」

みずき 「……でも、それは子どもだからできたことでもあると思います」

桜 「……」

みずき 「私たちはいつか大人になる。それも、そう遠くない未来に。だから、桜には自分のやりたい道に進んでほしいです」

桜 「……そっか。みずきはちゃんと、子どもを卒業するんだね」

みずき 「桜ですよ」

桜 「うん……頑張るよ」

みずきN 「桜はそれから黙ってしまった。一緒にいたい……嬉しい言葉だけれど、私は東京の美大に進みたいと考えている。ずっと傍にいてくれた桜には、もちろん感謝しきれない。けれど、今後それが続くのは申し訳ないし、桜のためにはならないだろう。そう思うと、なぜか胸の奥がちくりと痛んだ」

## 2. 揺れて、流れる

### ①公園・告白

みずき N 「二日後、コンクールの結果が出た。私は無事に地域予選を一位で通過し、本選に進むことができた。正直、かなりほっとした。実は提出した絵に、自信がなかったのだ。だってあの絵は……私が本当に描きたいものじゃない気がしていたから。……でも、だったら私は、いったい何を描きたいんだろう」

※週末。公園を散歩しているみずきと桜

SE…公園の環境音

SE…二人の足音

みずき 「(呟き) 人物、風景、静物……」

桜 「それでね、文化祭の準備まだ全然進んでなくて。大道具の材料、昨日大慌てで買に行っただけど……」

みずき 「……」

桜 「聞いてる？ みずき」

みずき 「えっ？ あ……すみません」

桜 「どうしたの、真剣な顔して。散歩飽きた？」

みずき 「いえ、ちよつとぼうつとしてて」

桜 「考え事？」

みずき 「ええ、まあ……」

桜 「へえ、何考えてたの？」

みずき 「大したことじゃありません。そう、きつと難しいことじゃないはずなんです。多分……」

桜 「……何かあったら、いつでも相談してくれていいんだからね？ あたしで役に立てるかどうかわかんないけど、できる限り力になるから」

みずき 「ええ、ありがとうございます、桜。私も貴女のためになれることなら、極力するつもりです」

桜 「ほんと？ いやあ数学の小テストの範囲教えて！」

みずき 「それは駄目です」

桜 「即答しないでよ！」

みずき 「それは貴女のためにならないでしょう。ちゃんと勉強してください」

桜 「(小声) むう、せっかくの土曜日なのにお小言なんてつまんなーい」

みずき 「聞こえてますよ……ところで、英語の小テストは乗り切れたんですか？」

桜 「もちろん！ ちゃーんと勉強したからねー」

みずき 「さすがです。やればできるのに……」

桜 「やるまでが大変なの。しなきゃいけないって思うと、それが重荷になって余計にできなくなるっていうか」

みずき 「……気持ちには、わかります」

桜 「でしょ？ だから……」

みずき 「だからこそ、それができる桜を尊敬しています」

桜 「うっ……褒め言葉で封じ込めるのずるい……」

みずき 「ふふ」

SE…桜、立ち止まる。続いてみずきも同様に！

桜 「そうだ、みずき！ コンクールどうだった？」

みずき 「あ……ええ、本選に進めることになりました」

桜 「ほんと！？ すごーい、おめでとー！ なんだ、言ってくれば良かったのに！」

みずき 「すみません、すっかり言い忘れてました。桜のおかげなのに」

桜 「あたしのおかげ？」

みずき 「ええ、いつもデッサンに付き合ってくれてるでしょう？」

桜 「あたしがしたのはそれだけだよ。予選突破できたのは、みずきの努力と実力」

みずき 「……ありがとうございます」

桜 「本選は違う絵を提出しなきゃいけないんだよね？ 何描くの？」

みずき 「……実は……何を描けばいいのかわからなくて」

桜 「もしかして、さっき考えてたのってそのこと？」

みずき 「ええ、恥ずかしながら」

桜 「そんなことない、悩んで当然だよ。けど、みずきでもそういうことあるんだね。

いつもさらさら描いてるから意外かも」

みずき 「(苦笑交じりに) 自分でもびっくりしてます」

桜 「うーん……何を描くか、か……やっぱり、みずきの好きなものがいーいんじゃない？ そのほうが描いてるとき楽しそうだし」

みずき 「好きなもの……」

みずきN 「そう言われて、今まで描いてきたものを思い出した。教室から見える外の景色、四季折々の花が一斉に咲く空想上の世界、夢で見た虹色の海……どれも私が好きなものだ。だけど、描いていて一番喜びを感じるのは……」

みずき 「(眩き) ……桜、だったんですね……」

SE…桜、ブランコのほうへ走っていく

桜 「みずき！ ブランコあるよ！ やろー！」

みずき 「えっ？ あ……(仕方ないと笑う) もう……」

SE…みずき、桜を追いかける

桜 「よいしょ、っと……」

SE…桜、ブランコに座る

桜 「久々に乗ったなあ。ちよつと小さいかな？」

みずき 「見るからに子ども用ですからね」

桜 「あたしたち、まだ子どもなのに……成長って残酷」

SE…桜、地面を蹴ってブランコが揺れる(継続)

桜 「あつ、でもいい感じかも。ねえみずき、背中押して！」

みずき 「ええ？ いいですけど……えいつ」

SE…みずき、桜に近づいて背中を押す

桜 「わっ……！ ちよつ、強いって！」

みずき 「えっ！」

桜 「あつ、でも……高いのもいい……なんていうか、懐かしい……！」

※みずき、ブランコで揺れている桜を見上げる

みずき 「……桜は、ブランコが似合いますね」

桜 「そう？」

みずき 「ええ、元気いっぱいな幼稚園児みたいで可愛いです」

桜 「それおちよくってない？」

みずき 「違いますよ。……でも、そのうち風で、どこかに飛ばされてしまいそうにも見え

ます」

桜  
「……」

みずき  
「……すみません、変なことを言いました」

桜  
「あたしはどこにも行かないよ。みずきが傍にいてくれる限り」

みずき  
「っ……」

桜  
「……ねえ、みずきも一緒にやる？」

みずき  
「え？」

桜  
「ブランコ。小さいときよくやったじゃん」

みずき  
「そうですけど、でももう高校生ですよ？」

桜  
「ここにブランコで遊んでる高校生がいるんですが」

みずき  
「……私もやるんですか？」

桜  
「いいでしょ、たまにはっちやけても。ほらー！」

みずき  
「……わかりました」

SE…みずき、桜の隣のブランコに座る

みずき  
「……つと……」

SE…みずき、土を蹴ってブランコが揺れ出す（継続）

みずき  
「っ……な、なんだか恥ずかしい……」

桜  
「ふふ、これでみずきも共犯」

みずき  
「別に悪いことなんてしてないでしょう」

桜  
「高校生がやるなんてー、っと思ってたでしょ？」

みずき  
「だからって『共犯』は大袈裟です。……（ぼそっと）思ったより、悪くないですね」

桜  
「楽しいよね、改めて遊ぶと。覚えてる？ 小学生のとき、あたしがブランコに立って乗ってたらうっかり手、放しちやっつて。けど前まわりして擦り傷だけで済んだの」

みずき  
「そんなこともありましたね。あのときは本当にヒヤヒヤしました。桜がふわっと宙に浮いて……一瞬空を飛んだのかと思って。怪我は酷くなくて安心しましたけど、そのあと先生やご両親から凄く怒られてましたね」

桜  
「あのときのお母さんってほんとに怖かった……あたしが悪いんだけど」  
みずき  
「ふふ」

SE…桜、ブランコから降りる

桜 「(降りて) ……いつまでも、こんな風に遊んでいられたらいいのにな」

SE…みずき、ブランコから降りる

みずき 「ブランコくらいなら、また付き合いますよ」

桜 「それ以外は？」

みずき 「それ以外にももちろん……桜？」

SE…桜、みずきの正面に移動

桜 「……ねえ、みずき」

みずき 「はい」

桜 「あたし、みずきのことが……好き」

みずき 「え？」

※短い沈黙

みずき 「あ……ありがとうございます」

桜 「……ん……それだけ？」

みずき 「へ？」

桜 「……えっと、その、つまりね……軽いノリとかじゃなくて、これは……」

みずき N「桜の表情を見て、私は何となくその意味を察した。好き……すき。え……好き？」

桜 「(気まずい) ……」

みずき 「(小さく息を吸って) ……桜。その、す、す……き、というのは」

桜 「うん」

みずき 「ええと……」

みずき N『『好き』を紐解こうとしたけれど、それは自分が抱いたことのない感情だった。でもおそらくこういう場合の『好き』は、小説やドラマでよくいうところの——』

みずき 「……好き、って……それは、私のことが……」

桜 「(恥ずかしそうに) っ……」

みずき N 「ああ、これはきつと、いわゆるそういう意味なのだ。けれど、そんな想いを向けられたのは初めてで……しかも相手が桜だなんて想像もしていなかったから、いまい感覚がわからない。……こういうとき、どういう反応をすればいいんだろう。私は今、どんな顔をしているんだろう……」

桜 「……あの……みずき」

みずき 「桜」

桜 「は、はいっ」

みずき 「ありがとうございます」

桜 「……うん」

みずき N 「……続きを、何て言おう。そもそも私は、桜をどう思ってる？ 彼女は幼稚園の時から親友で、大好きだけど……それがどんな『好き』かなんて、考えたこともなかった」

みずき 「……」

桜 「……急にこんなこと言ってごめん。びっくりさせちゃった……よね？ 迷惑だった？」

みずき 「いえ、そんなことは！ ……嬉しいです」

桜 「じゃあ……！」

みずき 「でも——」

みずき N 「桜は私を好きだといった。ずっと一緒にいたいとも。けれどそれに頷くということとは、彼女と同じ気持ちだということを認めて、なおかつこれからも彼女を自分の傍に縛り付けることになる。自分の気持ちも定まらないまま、そんな身勝手なことをするのは、彼女に対して誠実とはいえないのではないか……」

みずき 「……そろそろ行きましょう、桜」

桜 「えっ……？」

みずき 「もうすぐ日が暮れ始めます」

SE…ブランコから立ち上がり、歩き出すみずき

桜 「あ……」

※桜、みずきの背中を見つめる

桜

「みずき……」



### 3. 貴女が遠い

#### ① 美術室・文化祭

※文化祭、美術室。受付の席に座ってクロッキー帳と睨めっこしているみずき

SE…廊下から聞こえる生徒たちの楽しそうな声

みずき 「(呟き) 植物と桜……学校と桜……美術室……んー……こんなもありきたり……」

みずき N 「文化祭。正直あまり興味の無いイベント。だって美術部は過去の作品を部室に展示するだけで、それを見に来るのは一部の先生と保護者くらいだ。だから私は受付に座って、コンクールに出す作品の構想を練っているのだが……締め切りは迫ってきているのに、まったく良いインスピレーションが湧いてこない。私は桜を描きたい。けれど、桜のどんな姿を描けばいいのかわからない。それもこれも……あのことがずっと引っ掛かっているからだ」

SE…鉛筆を置く

みずき 「(溜息) ……まだ、信じられない」

みずき N 「あれからも桜はいつも通りだった。ちゃんと返事ができていない私に、何事もなかったかのように接してきた。もしかしたら、あれは夢だったのかもしれない。そんな冗談めいたことを考えながら、一日、また一日と時間が過ぎていく……」

SE…美術室のドアが開く

桜 「みーずき！」

みずき 「桜……」

SE…顔を上げるみずき

※桜、長いウィッグを被っている

みずき 「っ……その髪……どうして……」

SE…桜、ドアを閉める

桜 「どう？ 似合うでしょ。ウィッグって初めて被ったけど、案外違和感ないんだね」

みずき 「ウィッグ……」

桜 「クラスの出し物、劇だからさ。さつき本番終わったばかりなの。みずきにも見てほしかったなあ」

みずき 「ああ……すみません。この時間はここにいなきやいけなくて」

桜 「いいよいよ、けど受付暇そうだね」

みずき 「(小さく笑って) 楽でいいですよ」

みずきN「長いウィッグを被った桜を見た瞬間から、心臓がどくどくと早鐘を打っている。

一瞬、錯覚してしまった。長い髪の桜が帰ってきた気がしたのだ」

桜 「……みずき、どうしたの？ 見惚れちゃった？」

みずき 「ええ、そうですね」

桜 「(小さく驚く) つ……正直だね」

みずき 「とても似合ってます。(小声) それに……懐かしい」

桜 「(聞こえなかった) え？」

みずき 「本当に……綺麗です、桜」

桜 「う……うん、ありがとう。あ、そうだ、せっかくだからみずきの作品見せてよ！

飾ってあるんですよ」

みずき 「私のですか？ 構いませんよ」

SE…みずき、椅子から立ち上がる

SE…展示パネルへ向かう二人

桜 「どんな絵なの？」

みずき 「春に描いたものなんですけど……これです」

SE…二人、立ち止まる

※桜、パネルに展示されている桜の木の絵を見る

桜 「わあっ……桜だ……！」

みずき 「校庭の桜の木が印象的で、思わず筆を取っていたんです。学校の桜は三年目にしてやっと描きました」

桜 「凄い……三千ピースくらいのパズルにしてほしい……」

みずき 「ふふ、なんですかそれ」

桜 「だって、それくらい綺麗なんだもん。みずき、やっぱり凄いや……！　いつまでも見ていたくなっちゃう」

みずき 「桜にそう言っていたけると、嬉しいです」

桜 「うちの劇の大道具、手伝ってもらいたかったー！　この桜、イメージにぴったりなんだもん」

みずき 「……そうなんですか？」

桜 「うん。みずきが作ってくれたら、もっとお客さん惹き込めただろうなー……なんて。さすがに別のクラスのみずきをお願いするわけにはいかなかったもんね。この絵を見られただけで満足だよ」

みずき 「……あの、ちなみに劇って、どういう内容だったんです？」

桜 「あれ、言ってなかったっけ？　えっとね、この地域のある伝承をもとにした話なの」

みずき 「へえ……」

桜 「湖に、大きな桜の木が生えてるでしょ？　あの桜、雨が降ってもなかなか散らないことで有名じゃない。普通ならあつという間に花がなくなっちゃうのに」

みずき 「そうですね」

桜 「それって昔、ある男の人が、あの桜の木の下で亡くなった恋人の前で泣き続けたからだって言われてるんだって。それも七日間」

みずき 「七日間も……」

桜 「さすがにフィクションな気がするけどね。それでその人が桜を見上げて、『せめてあなたは長く咲いてくれ』って願ったらしいの」

みずき 「恋人さんの命と、雨が降ったら散ってしまう桜……どちらも儚いものだからこそ、その方は桜の木に祈りを込めたんですね」

桜 「切ないよね。……ねえ、みずきはあたしが散ったら……いなくなったら、悲しんでくれる？」

みずき 「……もちろんです」

桜 「それ聞いて安心した」

みずき N 「桜はどうしてそんなことを訊くんだろう。ずっと一緒にいたいって言っていたのに。彼女の気持ちが見えるようで見えなくて、私はつい口を開いていた」

みずき 「……あの、桜」

桜 「ん？」

みずき 「桜は、その……この間のことがあっても……いつも通りでいてくれるんですね」

※少しの沈黙

みずき 「す、すみません、こんなこと貴女に言うなんて……」

桜 「いつも通り、か。ふふ」

※桜、少し辛そうに微笑んで

桜 「あたし、変わらない？ 普段と」

みずき 「え、ええ……そう見えます」

桜 「……みずきはさ、絵を描くとき、よく『表面だけを描きたいわけじゃない』って  
言ってるでしょ」

みずき 「……はい」

桜 「人を描けば、その人の考え方や今まで経験してきたこと、風景なら数十年間の気  
候の影響とか、人の手がどれくらい入ったかとか、そういうことまで詰め込んで  
わけじゃない？」

みずき 「そうですね……」

桜 「じゃあ、あたしのことは？ ……あたしのは、どれくらい知ってて、どれく  
らい見てる？」

みずき 「……」

桜 「みずき、あたしはね——」

SE…桜、みずきに近づく

桜 「これでも結構、苦しいんだよ」

みずき 「……え……」

桜 「みずきはずるいね……あたしはちゃんと、みずきに気持ち、伝えたよ。だけどみ  
ずきは……何も、答えてくれない」

みずき 「っ……」

桜 「本当は辛い。あたしが言ったことは、みずきにとってただの世間話だった？  
それともぎくしゃくしたまま卒業を迎えて、バイバイしちゃうの？」

みずき 「ぎ、ぎくしゃくなんて」

桜 「してるよ。だから、はっきり言って……。あたしのこと、嫌い？」

みずき 「いいえ……いいえ、大好きです……!!」

桜 「じゃあその『好き』は、みずきにとって何？」

みずき 「……それは……」

桜 「本当に好きって思ってるなら……あたしをずっと、みずきの隣にさせてく

れるなら……あたしを、見て」

みずき 「(躊躇う) っ……」

※みずき、どうしても桜をまっすぐ見られない

桜 「(小さく息をついて) また、目……合わせてくれないね」

みずき 「……すみません」

桜 「あたし、本気だから。みずきのが好きなの。信じてもらえないかもしれないし、ドン引きしてるかもしれない。だってあたしたち、小さい頃から友達だから……。でもあたし、やっぱりみずきと、これからもずっと一緒にいたい。離れたくない！」

みずき 「……桜……」

みずき N 「正直、頭の中も心の中もぐちゃぐちゃだった。自分が何を思っているのか、まったく整理がつかない。どちらにせよ、それがどんな感情であれ、定めようとすることは今の私には耐えられなかった」

みずき 「……ごめんなさい、桜……!!」

桜 「あっ……!!」

S E …みずき、走り去る (美術室を出ていく)

みずき N 「だから私は、逃げることしかできなかった」

#### 4. 悩める乙女たち

##### ① 桜の部屋・後悔

※桜の家、自室

桜 「(後悔) あー……」

SE…ベッドに横たわる桜

桜N 「またやってしまった。なんて自分勝手なことをしてしまったんだろう。またみずきを、困らせてしまった。彼女にとって、とても大切な時期だってわかってるのに。でも、何もしないまま高校生活が終わってみずきを失うかもしれないと思うと、それは泣きそうなくらい怖かった」

桜 「……ずっと、隠しておけば良かったのかな。そうしたら……みずきにあんな顔させずに済んだのかな」

桜N 「公園で告白したのは、ほんの衝動だった。今年初めて違うクラスになって、みずきと話す時間が減って……それでもみずきは変わらず、ひたすら絵を描き続けた。対するあたしは、みずきと会う昼休みとデッサンのとき以外は、退屈で退屈で仕方なかった」

桜N 「夢を追いかけるみずきは眩しかった。そしてそれは同時に、私がいかに何も持っていないかを自覚させた。夢中になれることも、特別な才能もない。みずきはあたしと違って凄い人だし、絵を描く彼女が大好きだ。だから応援したい。でも……離れたくなかった。それでつい『一緒にいたい』と言ってしまったけど……」

(回想…1. ずっと一緒に)

みずき 「私たちはいつか大人になる。それも、そう遠くない未来に。だから、桜には自分のやりたい道に進んでほしいです」

(回想終わり)

桜N 「みずきはあたしと離れても、夢がある。絵がある。だから平気なんだ……あたしがいなくても」

※SE…桜、枕に顔を埋める

桜 「(長いため息) ……自分のやりたい道なんて、わからないよ……。あたし、一生大人になれない気がする……」

## ②桜の夢・きっかけ

※桜の夢の中、回想。小学五年生の頃。図工室で図工の授業中

SE…みずき、鉛筆で画用紙に絵を描いている

SE…桜、みずきに近づく

桜 「みずき、どこまで進んだ？」

みずき 「まだ下書きです。桜は？」

桜 「あたしはねー……まだ何も思い浮かばない！」

みずき 「……だったら、私を見に来てる場合じゃないのでは？ 早く描かないと終わらせんよ」

桜 「大丈夫だよ、図工って二時間続けてやるじゃん。終わるって」

みずき 「この間もそう言って色塗りに合わなかったでしょう？」

桜 「うっ……それはそうなんだけど……そんなことより！ みずきは相変わらず上手だね」

みずき 「……ありがとうございます」

桜 「それ、音楽室にあるピアノでしょ？ よく形覚えてるね……！」

みずき 「細かいところはなんとなくですが……学校にある物を描きましようって先生が言ったので、描いたことのないものをと」

桜 「それで描けちゃうのが凄いよ」

みずき 「ふふ、難しいですけど楽しいですよ。ほら、桜も席に戻って描いてください。今回こそは完成させないと」

桜 「……もうちょっとだけ見ていたいな」

みずき 「え？」

桜 「みずきが描くところ見るの、好きだから」

みずき 「(やや照れる) ……そうですか……ちよつとだけですよ？」

SE…しばらく描く音

みずき 「……あまりじつと見られると恥ずかしいです」

桜 「あたしのは気にしないで。幽霊とも思ってたよ」

みずき 「こんなに存在感のある幽霊はいませんよ」

桜 「えへへ」

みずき 「褒めてません……」

SE…桜、みずきの髪に触れる

桜 「……みずきってさー、幼稚園の時からずっと髪短いよね」

みずき 「どうしたんです、急に……まあ、確かに伸ばしたことはないかもですね」

桜 「それってなんで？　こだわり？　長いとヘアアレンジとかできるよ？」

みずき 「興味が無いわけではないんですけど……長い髪だとお手入れが大変ですし、お

風呂あがりに乾かすのにも時間がかかりますし……」

桜 「ああ……」

みずき 「それに、髪の毛に絵の具が付いて、絵を汚してしまうかもしれません」

桜 「……なるほどね。（笑い交じりに）みずきらしいや」

みずき 「そうですか？」

桜 「うん。あたし、みずきのそういうところ好き」

みずき 「……ありがとうございます。私も、桜のたまに訳がわからないところ、好きですよ」

桜 「（笑いながら）何よそれー！」

※夢（回想）終わり

SE…布団から顔を出す桜

桜 「（目を覚ます）ん……あ……寝ちゃってた……？」

桜N

「懐かしい夢を見た。小学校高学年くらいのことだ。絵を汚さないために髪を短くしているとみずきから聞いたあたしは、少しでもみずきに近づきたくて……翌日には髪を切り、それから一度も伸ばしていない」

SE…腕を伸ばしてサイドテーブルからスマホを手取る



※スマホの画面を確認した桜

桜 「……通知、来ないな」

### ③みずきの部屋・思い出

※数日後、みずきの家、みずきの部屋。机でクロッキーと睨めっこしているみずき

みずきN「美術室での一件以来、私と桜は会わなくなった。お昼休みや放課後に桜が来ることも、私から迎えに行くこともなかった。それもこれも、私がいつまでも悩んでいるせいだ。今日はついに学校を休んだ。いわゆるサボりだ。コンクールの作品をどうにかしないといけなかったというのもあるけれど、こんなときに学校でばったり桜に会うのが怖かったのだ。もう桜のことを、傷つけたくなかった」

SE…クロッキー帳を閉じる

みずき 「駄目……やっぱり描けない……」

みずきN「桜に会えない日が続くにつれて、桜を描こうとする手がさらに進まなくなる。ただでさえアイデアが浮かんでこないのに、これではコンクールなんてとても——」

SE…鉛筆を床に落とす

みずき 「あっ、もう……」

SE…椅子から下りて屈むみずき

みずき 「よい、しょ……あら？ これは……」

※机の隣の棚の一番下にアルバムを見つけるみずき

SE…棚からアルバムを取り出す

みずき 「……幼稚園のときのアルバム……こんなところにあっただ」

SE…みずき、椅子に座る

SE…机の上にアルバムを置き、開く

みずき 「わあ、懐かしい……！」

みずきN「日に焼けて色褪せたアルバムには、小さかった私たちがいた。もう名前を忘れてしまった子も大勢いるけれど、それでも私が写っている写真には、隣に桜の姿が必ずといっていいほどあった」

みずきN「彼女に出会う前は、絵を描いてばかりの私に誰も話しかけようとはしなかった。

私も、絵が描けるなら友達なんていらなと思うていた。けれど……桜はそんな私に、光をくれた。今もあまり人と話すのは得意じゃないけれど、桜がいてくれれば、私はそれで充分だった」

みずき 「依存、してますかね、こんなの……。だったらやっぱり、これ以上私に付き合わせるのは――」

SE…ページをめくると、一枚の画用紙が挟まっている

みずき 「なんででしょう、これ……」

SE…折られた画用紙を開く

みずき 「(驚く)っ……！」

※画用紙は、みずきが初めて桜を描いた絵

みずき 「……ふふ……へたっぴな絵……」

みずきN「それは、私が初めて描いた、桜の絵だった」

#### ④学校・決心

※時同じくして、学校の廊下

SE…廊下ガヤ、足音など

SE…階段を下りる桜

桜

「(溜息)……今頃みずき、コンクールの作品描いてるんだろうなあ。お昼、ちゃんと食べてるかな……無茶して倒れなきやいいけど……」

SE…廊下を歩く桜

桜N

「頭の中は、常にみずきのことといっぱいだった。あれから何度も連絡しようとしたけど、どうしてもできなかった。拒絶されることも、気を遣わせることも怖かった。あたしはいつの間に、こんなに憶病になってしまったんだろう」

桜

「って、あ……」

桜N

「あたしはいつの間にか、美術室の前に来てしまっていた。今日も真っ直ぐ帰ろうとしていたのに、みずきのことを考えてたから……。この間デッサンの練習に行かなかったのもあって、今は特に会いにくい」

桜

「……でも、謝らなきゃだよね……みずきが気にかけて絵が進んでない可能性だってあるわけだし……よし！」

SE…桜、ドアに手をかける

桜

「し、失礼します！」

SE…桜、ドアを開く

桜N

「中に入ると、知らない顔の人たちが十人ほど並んでキャンバスの前に座っていた。でもみずきの姿は見えない。あたしが尋ねると、部員である彼女たちは、みずきは今日、学校を休んだと言った」

桜

「失礼しましたー……」

SE…ドアを閉める

SE…廊下を歩きだす桜

桜N

「みずきが、学校を休んだ。もしかしてあたしのせい？ あたしが追い詰めてしまったのだろうか。だとしたら、とんでもないことをしてしまった。あたしはみずきの絵を描く時間も楽しみも奪いたくなんてなかったのに……」

SE…足を止める桜

桜N

「明日は、デッサンに付き合う日。前にみずきが、コンクールに応募する前の最後の練習日だって言ってた。みずきにとって貴重な練習だ。ここであたしが行かなかったら、あの子は何をデッサンするんだろう。それに精神面だって不安だ。コンクールの絵は完成するんだろうか。色んなことが脳裏を駆け巡って……その中でふいに、一つの疑問が浮かんだ」

桜

「みずきは……何の絵を描いてるんだろう」

桜N

「そうだ、あたしはみずきの絵が好きだ。絵に真っ直ぐなみずきが、好きだ。それなのにあたしは、自分が気持ちを伝えてすっきりしたいからって、告白なんてして……」

SE…再び歩き出す桜

桜N

「また、間違えてしまうかもしれない。でも、あたしが今、みずきにしてあげられることは……」

SE…足音FO

## 5. 内側を覗けば

### ①美術室・再会

※翌日、放課後の美術室。みずき、席に座っている

SE…スケッチブックを開く

みずき 「……今までたくさん、描いてきましたね……」

みずきN 「今日はデッサン練習。桜は来てくれるだろうか。先日の練習では、彼女は姿を見せなかった。もしかしたらもう、二度とここに来ることはないのかもしれない」

SE…ページをめくる

みずきN 「中学でも高校でも、桜は私のモデルになってくれた。高校では部員じゃない生徒を部室に入れるのは控えると言われてしまったため、先生に交渉して、部活のない曜日に美術室を開けてもらうことになった。だからこの時間はいつも、私と桜、二人だけの時間。二人きりの、かけがえのない時間だったのだ」

SE…壁時計の針が動く

みずき 「……時間、過ぎちゃった」

SE…スケッチブックを閉じる

SE…椅子から立ち上がるみずき

SE…美術室のドアが開く

桜 「みずきっ！」

SE…桜が入ってくる

みずき 「(驚く) 桜……来てくれたんですね」

桜 「……今日は……来なきやと思つて」

みずき 「(安心したように微笑む) ……ありがとうございます」

桜 「……えつと……」

みずき 「……」

桜 「は、早く描いて！ 時間なくなっちゃうよ」

みずき 「は、はい。そうしましょう」

SE…桜、みずきの右隣の席に移動して座る

桜 「……今日は、どんなポーズがいい？」

みずき 「……では、私を見ていてください」

桜 「えっ？」

みずき 「真っ直ぐ私を見つめて、そのままいてください」

桜 「……わかった」

SE…みずき、スケッチブックをめくる

SE…みずき、鉛筆で描き始める（継続）

桜 「……喋ってもいい？ 動かないから」

みずき 「ええ」

桜 「コンクールの作品、どんな感じ？」

みずき 「……実はまだ、描き始めてないんです」

桜 「えっ……ほんとに？」

みずき 「残念ながら」

桜 「……間に合いそう？」

みずき 「明日から描けば、なんとか」

桜 「そっか……（訊きづらそうに）何描く予定なの？」

みずき 「（答えようか迷っている）……」

桜 「あー……楽しみにしてる。完成したら見せてよね」

みずき 「ええ」

※しばらく描く音が続いて

桜 「……みずき」

みずき 「はい」

桜 「この間はごめん」

みずき 「（微かに戸惑う）……いいえ。私のほうこそ……ごめんなさい」

桜 「大事な時期だってわかっているのに、自分勝手だった。……もし、コンクールの絵

が描けない原因が、あたしだったら……」

SE…描くのを止める

みずき 「いえ！ ……そんなことは」

桜 「そんなこと、あるでしょ？」

みずき 「……桜は、悪くないんです。ただ、私の中で上手く整理できなかったというか……」

桜 「それは……しようがないよ」

みずき 「……桜」

桜 「なあに？」

みずき 「私は、桜と出会って、一緒にいられて、とても幸せでした。楽しいときも辛いときも、寄り添ってくれて……もちろん、喧嘩したこともありましたが」

桜 「(笑い交じりに) そうだね。けど、ちゃんと仲直りしてきた」

みずき 「だからこれから先、何があっても、私たちが親友であることに変わりはないと思っています。そう、願いたいです」

桜 「……うん」

みずき 「すみません、手を止めてましたね」

SE…みずき、再び描き始める(継続)

みずき 「桜を描くのは、これで何度目でしょうか。デッサンの練習をするときは、いつも手伝ってもらってましたね」

桜 「ふふ、専属モデルだからね」

みずき 「こんなに素敵なモデルさんはいません。……あの、実は昨日、部屋でアルバムを見つけたんです。幼稚園の」

桜 「へえ……！」

みずき 「そうしたらその中に、絵が挟まっていました。貴女が転園してきた日のものです」

桜 「……あたしを描いた最初の絵ってこと？」

みずき 「ええ。骨格は歪んで、頭と体のバランスはおかしくて、ちっとも上手くなかった……ですが、私にはあの絵が、今まで描いた中で一番純粋なものに思えました」

桜 「……あたしも……あたしも、あの絵が好きだった。驚いたの。みずきが描いたあたしは、みんなが思うようなあたしじゃない。まるで心を覗かれた気がして……ちよつと焦ったけど、嬉しかった」

みずき 「……そんな風に思ってたんですね」

桜 「あたし、みずきの絵、大好きなの。だから応援したい、これは本当。だからあたし……もしみずきが望むなら、あたしのことが嫌なら、離れたって大丈夫だから」

SE…みずき、手を止めて鉛筆を置く

みずき 「終わりました」

桜 「……見せてもらってもいい？」

みずき 「どうぞ」

SE…桜、スケッチブックを覗き込む

桜 「ふふ……やっぱり凄いや、みずきは」

みずき 「モデルがいいからですよ」

桜 「まあね」

SE…桜、姿勢を戻す

みずき 「……桜」

桜 「うん」

みずき 「私……東京の美大に行こうと思ってます。絵を本格的に学びたいんです。そして、画家になる夢を叶えたい。だから……」

※少しの沈黙

桜 「……知ってた。前に家行ったとき、部屋に資料置いてあったし。それに画家になりたいうっていうみずきの気持ちは本物だってわかってたから」

みずき 「（驚きと安堵）……そうだったんですね」

桜 「なんで言ってくれないんだろうーって思ってたけど、あたしが寂しがるってわかってたからなんだよね」

みずき 「いえ、その……どちらかというと、私のほうが」

桜 「え？」

みずき 「私が、寂しかったんです。桜と離れるのが」

桜 「……で、でも、みずき……あたしのやりたい道に進め、って」

みずき 「それは……だって私といたって、桜のためにはならないじゃないですか……」

桜 「（小さく驚く）っ……」

みずき 「……ずっと貴女を描いてきて、ずっと貴女を隣で見えてきて……私だって、貴女を応援したいんです。それだけは、伝えておきたくて」



SE…学校のチャイム

みずき 「……下校の時間みたいですね。今日は職員会議があるから早いつて言ってます」

桜 「(小声) あ……あたし……」

みずき 「はい？」

桜 「みずき、家に帰って絵描くんでしょ!？」

みずき 「え、ええ。ラフだけでも詰めたいので」

桜 「あたしも……行きたい!」

②美術室・スケッチブックの中身

※時間経過。美術室を片付けている二人

SE…片付ける音

みずき 「……」

桜 「……」

桜 「ねえ……嫌じゃ、ない？」

みずき 「何がですか？」

桜 「あたしが家に行くこと」

みずき 「嫌なんかじゃありませんよ。今までだってよく来てたじゃないですか」

桜 「……ありがと。あの、みずきはさ……あつ」

SE…桜、机にぶつかり、スケッチブックの中の紙が散らばる

桜 「ご、ごめん!」

みずき 「あ、私が……!」

SE…しゃがみ込む桜

SE…桜、落ちている紙を手取る

桜 「……これって」

※紙はすべて桜をスケッチしたもの。すべての髪が長く描かれている

桜 「みずき……」

SE…桜、立ち上がってみずきを見上げる

※みずき、顔を赤らめる

みずき 「っ……見ました？」

桜 「……うん」

※しばらく沈黙

みずき 「……か、片付け、早く終わらせないとすね」

SE…みずき、紙を拾い集める

桜 「うん。あ……こつちにも落ちてるよ」

SE…しゃがむ桜

SE…手が触れ合う

桜 「あっ……」

みずき 「っ……」

桜 「ご、ごめん……手……」

みずき 「いえ……ありがとう」

SE…みずき、紙を回収し立ち上がってスケッチブックを机に置く

みずき 「あの、私、家に持ち帰る画材取ってきます。すみませんが、カーテンを閉めておいてもらえますか？」

桜 「わかった」

SE…みずき、隣の部屋（美術準備室）へ駆けていく（ドア開閉）

SE…桜、立ち上がる

桜N

「今までスケッチされた私は、どれも髪が長く描かれていた。小学生のときに切ってから、一度も伸ばしていない髪。みずきとお揃いの、短い髪。でも、みずきはそれを嫌っていたのだろうか。それとも、今のあたしより、昔のあたしのほうが……」

桜

「(自嘲気味に笑って) あたし……みずきのこと好きすぎでしょ」

SE…桜、窓へ近づく

桜

「もう、面倒だなあー……十年以上の付き合いなのに、今さらこんなことになるなんて」

SE…カーテンを閉める

桜

「えっと、あっちも閉めないと……」

SE…桜、移動して

SE…カーテンを閉める

桜

「(気づく) ん？」

※桜、美術室後方の棚に何かがあるのを見つける

SE…棚に近づく

桜

「これ、文化祭のときに使ったウィッグ……置きっぱなしにしてたんだ」

SE…桜、ウィッグを手に取る

桜

「……長い髪、か」

SE…ドアが開き、みずきがやってくる

みずき

「お待たせしました」

桜

「あっ……うん！」

SE…桜、ウィッグを背に隠す

桜 「じゃあ……行こっか、家」

みずき 「はい」

SE…桜とみずき、机のほうに移動して鞆を手取る

桜 「……」

SE…桜、鞆をそっと開けてウィングをしまう

みずき 「どうしました？」

桜 「う、ううん、何でも」

SE…鞆を閉める

## 6. キャンバスにのせる

① みずきの部屋・みずきの気持ち

※みずきの家、みずきの部屋

SE…ドアを開け、部屋に入る二人

桜 「お邪魔します」

みずき 「荷物、適当に置いてください。私はお茶の用意をします」

桜 「あ、ううん！ だいたいだからおかまいなく。絵の邪魔もする気ないし」

みずき 「お客様をもてなさないなんて、私が嫌なんです。それに……たまには一緒にお茶もしたいですし」

桜 「あ……ありがとう」

みずき 「じゃあ、待っててくださいね」

SE…部屋を出ていくみずき

桜 「……気、遣わせちゃったかな。いや、みずきはもとそういう子だったか」

SE…桜、カーペットの上に鞆を置いて座り、中からウィッグを取り出す

桜 「あたしが……あたしが、みずきの望む『昔の桜』だったら、傍に置いてもらえるのかな……なんて」

SE…桜、ウィッグを被る

SE…ドレッサーの前へ向かう

※鏡と向かい合う桜

桜 「……そういえば、小さい頃はこれくらいの長さだったかも」

桜N

「さっき美術室で過去のスケッチを見たとき、一瞬ウィッグを被ったあたしを描いたのかと思った。だけど、髪はどこか不自然に書き足されていて……だからもしかしたら、みずきはずっと前から、幼稚園の頃のあたしのことを考えていたのかもしれない」

桜 「どっちにしても、こんなことしたって、もうみずきは……」

※お茶とお菓子を持ったみずきが入ってくる

SE…ドアが開いてみずきが入室

みずき 「桜、お茶を……（桜の髪に気づく）っ……！」

桜 「あ……」

SE…みずき、ゆっくりと歩く

みずき 「桜……」

桜 「ど、どうかな？」

みずき 「……」

桜 「な、何か言ってよ……」

SE…みずき、机上に盆を置く

SE…みずき、桜のほうを向く

みずき 「……凄く、似合ってます。文化祭のときのウィッグですね」

桜 「そうだよ……」

※少しの沈黙

桜 「……やっぱりみずきは、昔のあたしのほうが良かった……？」

SE…みずき、桜のウィッグに触れる

みずき 「長い髪……あの頃にそっくりです。綺麗……。ですが……」

SE…みずき、桜のウィッグを取る

みずき 「これは没収です」

桜 「えっ……」

※SE…みずき、ウィッグを机の上に置く

※きよんとしている桜を見て笑うみずき

みずき 「もうこんなもの、いりませんから」

桜 「で、でも、みずきは……」

みずき 「(人差し指を桜の唇にあてる) しー……せっかくなので、もうちょっとだけ練習、付き合ってください」

桜 「え……」

みずき 「座って」

桜 「(何が何だかわからない) ……」

SE…桜、クッションの上に座る

SE…みずき、机の棚からスケッチブックを取り出し、ペンと共に持ってきてクッションの上に座る

みずき 「そのまま、動かないでくださいね」

桜 「(過去を思い出す) あ……」

(回想…プロローグ)

SE…桜、みずきの右側の席に座り向かい合う

桜 「これでいい？」

みずき 「そのまま動かないで」

桜 「う、うん」

SE…みずき、画用紙にクレヨンで描く(継続)

桜 「……もしかして、あたしのこと描いてるの？」

みずき 「動かないでください」

桜 「むー……」

(回想終わり)

SE…みずき、鉛筆で描き始める(継続)

みずき 「私、コンクールでは……桜、貴女を描こうと思ってます」

桜 「えっ、あたし？」

みずき 「ええ。やっぱり、私が代表作として描きたいのは、桜ですから」

桜 「そ、そつか……なんだ、照れちゃうな……けど、このままでいいの？ みずきは、髪が長かったあたしのほうが……」

みずき 「……確かに私は、長い髪の桜がとても好きでした。ですが、桜に告白されて、あまり会えなくなつて、昔の絵を見返して……私の幼馴染で大切な人は、今の桜だと気づいたんです」

桜 「みずき……」

みずき 「もちろん、昔の桜も好きですけどね。今の貴女は、もつと好きです。だから今は……そのままの貴女を、描かせてください」

桜 「(感激)っ……………」

みずき 「ふふ」

桜 「……みずき……そのままでもいいから聞いて。……あたし、みずきにそう思つてもらえて、嬉しい。(涙ぐみ始める) あのままみずきと離れ離れになるんじゃないかつて、不安で……そんなの嫌で……でも、あたしの気持ちは、押し付けていいものなんかじゃなくて」

みずき 「押し付けられたなんて思つてませんよ。それに……私も同じです」

桜 「え？」

みずき 「動揺して、焦つて、悩んで、苦しくなつてしまふくらい……貴女のことを、大切に思っています。正直、これが恋なのかはわかりません。ですが……このあたかな気持ちを、これからも……大事にしたい」

桜 「うん……。ねえ、あたしも正直に言つていい？」

みずき 「はい、この際全部言ってください」

桜 「あたし、自分のやりたいこと、まだわかつてない。けど、絵を描くみずきの傍にいたい。その上で、あたしのやりたいことを見つけに東京に行きたい。それじゃ……だめ、かな」

SE…みずき、手を止めて鉛筆を置く

みずき 「……私が絵を描き続けられたのは、個人的な趣味だけではなく、桜がいつも隣にいてくれたからです。ですから、貴女が自分自身も大切にしてくれるなら、私はそれを喜んで受け入れます」

桜 「……今さらんだけど、あたし……みずきに釣り合う人間じゃないよ。あたしはみずきと違って、何も持つてない」

みずき 「比べるものじゃありませんよ。それに桜こそ、私が持つていないものをたくさん持つてます。だから、これから二人で……」



桜 「(泣くのを我慢している) ……ありがとう、みずき……」

SE…みずき、桜にゆっくりと顔を近づける

みずき 「桜……」

SE…みずき、桜の頬に手をあてる

桜 「うん……」

みずき 「好きですよ…… (頬にキス)」

桜 「…… (抱き締める) っ……」

SE…桜、みずきを抱き締める

みずき 「(微かに驚き、微笑む) ……桜は、あたたかいですね……」

みずきN「誰もが憧れる桜を、私が独り占めしてしまっているのだろうか、ずっと悩んできた。そのことに対する罪悪感と寂しさから、つい昔の桜に会いたくなってしまうたのかもしれない。いつだって、桜は桜だったのに」

みずきN「私を包み込む彼女の体温は、とても心地が良かった。そう……まるで、桜の花びらと寄り添ったみたい——」

## エピソード

### ① 電車内・新生活

※翌春。みずきと桜、電車内で座っている

SE…電車走行音（継続）

桜 「……ねえ、あと何分？」

みずき 「まだ四十分しか経ってないですよ」

桜 「うそ！ もう飽きたー！」

みずき 「桜、電車の中ではお静かに」

桜 「だってー……乗り換えまでまだまだかかるじゃん。やっぱ新幹線にすれば良かったかなー」

みずき 「交通費節約しようって言ったの、桜じゃないですか」

桜 「そ、そうだけど……ほんと、東京って遠いんだねー」

みずき 「ですね……今から楽しみです」

桜 「……うん、あたしも楽しみ。これからは華の大学生活だー！ 遊ぶぞー！」

みずき 「遊ぶのもいいですけど、お勉強もちゃんとしてくださいね。あと、家事も分担しますから」

桜 「へへへ、みずきと一緒に住めるなんて嬉しいー」

みずき 「聞いてますか？」

桜 「ます！ シェアハウスなんて幸せすぎる……」

みずき 「もう……ふふ」

桜N 「三月。あたしとみずきは、揃って上京することになった。みずきは第一志望の美大に合格して夢に一步近づき、あたしは自分のやりたいことを探すために大学に入ることにした。みずきのように夢中になれることに出会いたいと、今は前向きに思える。みずきと一緒になら、きっと見つけられる。そんな気がするのだ」

SE…みずき、桜の髪に触れる

桜 「……なあに？ 髪に何かついてる？」

みずき 「いえ、相変わらず綺麗だなあと思っています」

桜 「（照れる）えっ、あ、ありがとう……」

みずき 「伸びてきましたね」

桜 「そうだね、まだほんのちよつとだけど」  
みずき 「どれくらい伸ばすんですか？」  
桜 「んー、まだ未定。けど、長い三つ編みでできるくらいまで伸ばしてみようかなあ」  
みずき 「三つ編みですか？ 珍しいですね」  
桜 「幼稚園の頃、よくあたしの髪結んでくれてたでしょ。またやってほしいなっ  
つて」  
みずき 「(微笑んで)三つ編みでもポニーテールでも、何でもやりますよ。桜のためなら」  
桜 「ふふ」

※少しの沈黙

桜 「……ねえ、手、繋ごうよ」  
みずき 「えっ、ここでですか？」  
桜 「うん……だめ？」  
みずき 「ひ、人目があるところではその……恥ずかしい、です」  
桜 「……そっかあ。ま、こういうのはちよつとずつやっていけばいいか。あたしは今  
のままでも充分幸せだし」  
みずき 「うう……」  
桜 「みずきちゃんは可愛いなあー」

SE…みずき、桜の手をとる

みずき 「ん……」  
桜 「えっ……？ ちょ……手……何してるんですか」  
みずき 「繋いでるんですが」  
桜 「いや、それはわかるけど」  
みずき 「……わ、私だって、桜とこうしたいって思ったんです！」  
桜 「(照れる)っ……」

※みずき、余裕のない桜の表情を見て面白がる

みずき 「ふふ……桜は本当に可愛いですね」  
桜 「こ………こんにやろー！」

SE…桜、みずきの脇腹をくすぐる

みずき 「(笑いながら) ちよつ、やだ、あははっ、やめてくださいっ……!」

桜 「まいったかー!」

みずき 「やっ、ははっ、ふふ、もう……!」

桜 「ふふっ」

桜N 「電車がトンネルを抜けて、知らない町を走っていく。この世界は、まだまだあた

しが知らないことだらけだ。でも、あたしは確信していた。東京で見られる景色も、生活も、みずきが隣にいればきっと楽しい」

※窓の向こうを見るみずき

みずき 「あ、見てください。桜が咲いてますよ……!」

桜 「どれどれ? あっ、ほんとだー!」

SE…電車走行音FO

FIN